

電友会全国連合会報

第 24 号

78. 10



目次

私の健康法	泉 節太郎	二
電退連総会開催		二
電退連事務局長打合会開催		二
香川電友会総会記		三
共済会だより(三)		四
事務局からのおねがい・おしらせ		四
「でんでん日尾クラブ」第四回集会		五
表紙のことば	莊野 丹秀	五
随 想	岩原 文男	五
短 歌	藤田 基孝	五
余 栄・訃 報		五
特集		六
灯火に親しむ		六
高橋 数一	松本 義男	沢 千代吉	高橋 寛
村上 季隆	真鍋要三郎	栗田 信雄	田中 義隆
長崎 輝喜	福田秋風郎	宮脇 義雄	太田 集
夷 俊雄			
随 筆	藤田基孝・高橋数一・岡崎花子	二〇
谷 信雄・岡本政雄・吉村正雄		三
編集後記		三



私の健康法

電友会四国連合会長

泉 節太郎

私の健康法は、朝の布団の中から始まる。眼が覚めると、仰向に寝たまま、寝巻をくつろげて、腹部摩擦を始めるのである。腹に手を当て、掌で右廻りに五十回強く押さえて回転させる。永年の経験から、これは胃腸のみならず、肝臓や腎臓をも強くする効果があると思う。

それが終ると起き上がり、やはり布団の上で、タワシ摩擦をする。タワシは薬局で売っている健康タワシ。まず足先から脚のつけ根へ向けて。次には腕を手先から肩の方へ。終ったら背中だ（このタワシには二本の紐がついている）。終って腹、次には胸から首、特に頸動脈の部分を強く。この摩擦は全身の血液の循環をよくする効果がある。

わたしが床を離れるのは、大抵四時三十分から四十分の間である。これがため、夜寝る時、目覚まし時計を四時二十分にセットしておく。

洗面を終れば風呂場へ入って、冷水浴をやる。水をバケツに三杯汲んでおき、そのうち二杯は肩から上体へ、一杯は腰から下へ。この頃（夏）はこれが非常に快い。寝ぐるしい

夜の汗ばんだ身体も、水を浴びて、乾いたタオルで「つゆ」を拭きとったあとの爽快さはたとえようがない。

冬の水は冷たい。いや、冷たいというより痛いと感じる朝も多いが、「つゆ」を拭きとって、丹前を着ると、身体がホカホカと暖かくなる。これはもう四十年以上続けているが、若い時、年中風邪を引いた症状の身体の弱い人間であった私だが、この二十数年間は、殆んど風邪を引かない。引いても鼻風邪ぐらいで大抵一日ぐらいいでおっている。

冷水浴が終ると、服に着換えて外へ出、ラジオ体操とゴルフの素振を二、三分間やる。それが終ると茶を立てて抹茶を一服、それから三十分間書齋で坐禅をやる。これは心の健康のためだ。健康とは、肉体だけが強いのではない。ほんとうの健康は心身ともに健全であることを要する。たとえ悟りは開かれずとも、できるだけ我執に捉われず、サラットした気持で過ごす時間が多くなれば、それだけ、心が健康になったと言えるのではないかと思う。

坐禅を終って約一時間の読書。これも頭の訓練と教養のため、やはり心の健康法と言えは言える。

以上が朝食前の私の日課である。このほかに時どきゴルフコースへ出る。

私の健康法は何れも永い。冷水浴四十余年は前に言った通り。腹部摩擦とタワシ摩擦も何れも二十年を越している。

私は若い時身体が非常に弱かった。それを薬や注射という現代医学の方法によらず、以上のような自然の療法を忍耐強く継続する

とによって、体質を改造してきたのである。私は今年七十二才。今のところ、何処にも異常はないようである。この健康を有難く思う。

電退連総会開催

電退連（電電公社退職者団体連合会）の第九回定例総会は去る六月八日午前十一時から午後一時まで東京都千代田区大手町通信協会集會室で開催され泉連合会長が出席した。

議題は次のとおり。

- 一 昭和五十二年度事業報告書承認の件
- 二 同 決算報告書承認の件
- 三 昭和五十三年度事業計画（案）承認の件
- 四 収支予算（案）承認の件
- 五 役員選任の件

役員改選で吉村電電千代田会会長が副会長に、泉電友会四国連合会会長等が理事に選任された。

なお昭和五十四年度恩給・共済年金受給者の処遇改善に関する関係の向きへの陳情書の内容については前号（電友四国第二十三号）掲載のとおり本総会において決定され、強力な陳情運動を行うこととなった。

電退連事務局長打合会開催

五十三年度事務局長打合会は七月二十日東京都千代田区大手町通信協会集會室において開催され、当会より玉川事務局長が出席した。

本行廣会長はじめ佐藤常任理事、嬉野事務局長、坪内次長のほか全国各団体事務局長が参加して次の議題について協議を行った。

なお開会にさきだつて参議院議員長田裕二先生からのごあいさつがあった。

一 昭和五十三年度恩給・共済年金の改善について

前号掲載のとおり改訂され、各人に改訂年金額が通知されておる。また四月五月分の追給についても七月六日まで追加支給されている。

二 昭和五十四年度恩給・共済年金の改善について

前号掲載のとおりとし陳情書の提出時期は本部の指示によることとなった。

(本陳情書は八月末日までに電電公社退職者団体連合会長と各県の会長が連名で国會議員に提出陳情を行った。)

三 その他懸案事項(公社の回答)

1 生存者叙勲の範囲拡大について
○困難な状況にあるが今後も引続き努力する。

2 死亡者叙勲について

○勲記、勲章等の伝達日数の平準化、短縮化につとめ、百カ日以内は無理であるが、今後は五カ月以内に届けられるようになる。

3 部内医療機関のない地域における医療共済の実施について

○公社、全電通労組、共済会の三者で構成する医療共済小委員会にて検討した結果、主として財政上の理由で実現困難との結論に達し、遺憾ながら実施できないので諒承されたい。

4 共済組合の任意継続組合員期間の延長について

○昨年以降進展していない。

5 医療共済における老人医療費の無料化について

○部内医療機関は保険医療機関でないことまた医療共済は健康保険法その他の法律にもとづく保険ではないので、老人医療無料化の適用がうけられない。

6 部内医療機関を保険医療機関とすることについて

○通信病院等は、職域病院として設立、運営されているものであり、保険医療機関とすることはできないので諒承されたい。

7 共済組合の任意継続組合員の資格その後における医療共済への加入申込について

○共済組合の任意継続組合員でない医療共済の加入者は、健保または国保の保険料のほかに医療共済の掛金を支払っている。したがって、もし任意継続組合員の医療共済への加入を組合員の資格を失後でもよいとすると、組合員である二年間は任意継続組合員との均こうを欠くことになるので任意継続組合員も、その他の者と同様に医療共済の加入申込期間を退職後六カ月以内としているわけである。

しかし、最近における任意継続組合員の増加に伴い、本件についての要望も逐次増大してきている状況にかんがみ、任意継続組合員とそうでない者との不均こうを是正することを考慮しつつ検討することとした。

8 特約保養所の利用について
○遺憾ながら要望に応じかねる。

香川電友会総会記

香川電友会定期総会は五月三十日新緑燃える高松城内の披雲閣大広間で会員一六三名出席のうえ開催された。

折り悪しく早朝よりの雨であったが、開会の十一時には晴れ間も見え緑がひときわ美しく、環境に恵まれ窓越しにみる築庭の美を見直した次第であった。

総会は午前十一時開会、まず逝去された会員のご冥福を祈って黙禱を捧げた後、会長あいさつに次ぎ議長に木野戸繁行氏を選出し、一般経過報告、会計報告および会計監査報告が行われ、会則の一部改正に入った。今回の改正は会費値上げであったが、年会費の改正も全員一致で可決された。続いて会長改選に移ったが猪谷会長より辞任の申し入れがあり、議長提案に基づき執行部から副会長池田清澄氏を推せん、会員の賛同により同氏が新会長に就任し、猪谷前会長は相談役になった。

新会長あいさつの後役員指名により副会長一名、幹事九名(常任一と増員二を含む)、会計監査一名の大巾な変更があり、当会の役員は会長一、副会長二、常任幹事二、幹事一三、会計監査二の二〇名となった。次いで長寿祝(喜寿)の贈呈式に移り、一一名の方々に拍手のうちに贈呈を行ない閉会した。

総会終了に続いて顧問の方々を交え懇談会に移り、石井香川通信部長のあいさつ、新入会員の紹介を行ない、玉木高松電話局長の乾盃で懇談となった。

当懇談会の一工夫として「のど自慢」が取りあげられ、世話役香西伊三郎氏により一段

と盛りあがりを見て、新緑の会場での久方振りの会合に興趣味つはてるともなく、時を忘れる盛況であったが午後四時前、次の会合を期待しつつ三々五々連れ立って緑の中へ消えていった。
(高松・久米記)

共済会だより

(三)

電気通信共済会四国支部
福祉相談所

肢体不自由などのご家族に、本年度も援護のお見舞金を贈呈することになっています。詳細は「電電四国」七月号に掲載していますのでご覧ください。

〇お子さんの勉学に

育英資金をお貸しします

一 貸付対象
公社、全電通、会に永年勤続した退職者及びその死亡した方、並びに在職中死亡した方等の子で学資の支弁に困難な方

二 貸付内容

高 校……………毎月 一万円
大 学(自宅通学)……………毎月 一万五千元
(自宅外通学)……………毎月 二万円
短大、高専……………毎月 一万五千元

三 返済方法

卒業の翌月から高校は五年以内、大学は十年以内に半年賦または年賦で返済していただきます。利息は年三分です。

詳しくお知りになりたい方は、福祉相談所(三三三—三三三三)へお問い合わせください。

〇 お知らせ

すでにご案内のとおり、第四回電電OB大学(園芸科)は十月二十一日(土)奥道後において菊花展の実習見学を予定しています。次のとおりバスを配車しますので多数の方のご参加をお待ちしています。

奥道後バス(黄色のバス二台)

国鉄松山駅前発……………一二、四〇
伊予鉄松山市駅前発……………一二、五〇
一番町(三越前普井病院側)……………一三、〇五
道後(新温泉公園入口)……………一三、〇五

なお、復路は現地解散にしますので配車はいたしませんからご了承ください。

事務局からのおねがい

会員死亡のときはすぐに連絡を

死亡者叙勲の対象者は、在職中死亡の場合だけでなく、すでに退職しているものであっても、一定の資格、年限に達しておれば詮議されます。ただし、この死亡者叙勲は、死亡の日を含めて三〇日以内に、本社、郵政省および総理府賞勲局を経て、閣議に請願され、上奏裁可を得ることになっており、その手続き期限はきわめて厳格で、期間経過後は取り扱われないことになっていきます。したがって、**死亡後三日以内**に、通信局秘書課へ通知がないと、上申できない場合がありますので、家族、友人、知己の方は速やかに各県退職者の会事務所および電友会四国連合会(松山(〇八九九)三六一—二〇二三)へ連絡して下さい。また在職二〇年以上の退職者が死亡した場合

合は、通信局長または総裁からの弔電がいただけますので、少くとも告別式までに秘書課へ連絡をとらなければなりませんから前記により連絡方よろしくおねがいます。

おしらせ

〇電友会四国連合会総会の開催

本年度の連合会総会は十一月十五日(水曜日)徳島駅前阿波観光ホテルで開催する予定です。代議員の方には詳細後報致します。

〇昭和五十三年度各県の会総会

本年度の総会は次のとおり開催の予定です。
高知 十月二十日(金)午前十時
高知市南ハリマヤ町 得月楼
愛媛 十月三十一日(火)午前十時半
松山市本町一 南海放送本町会館
徳島 十一月十六日(木)午前十時
徳島駅前 阿波観光ホテル

〇保険料控除申告書の提出について

今月は保険料控除申告書の提出月です。扶養控除等申告書(本年一月十日までに職員部厚生課長あて提出した方)を提出された方で当年中に支払った保険料がある場合は、忘れずに四国電気通信局職員部厚生課長あて十月十日までに提出して下さい。余白に年金証書記号番号と自宅電話番号を洩らさないように。

〇電電公社保養所の利用について

保養所の一覧表は会員名簿の末尾に載せてあります。保養所利用申込書は各県の会事務所にありますから発行して貰えます。

「でんでん日尾クラブ」第四回集会

連日の猛暑にうだる七月十五日午後、冷房のきいた久米公民館で、松山市久米地区居住OBの夏季集会を開催した。

今回は会員の話を聞く集りで、(1)政本会員の古銭入門から妙味におよぶ「古銭蒐集」、(2)宮下会員の業務研修旅行の見聞にもとづく「欧州事情」、(3)泉会員のゆたかな教養ときびしい日常に触れる「老後の生活」を拝聴する。

三氏それぞれの味わい深い話を、肩を張らずに聞けるのが、近所づきあいよさというもの。次の議事に移るまでの休憩に、息継ぎの確ビールが配られる。

次期世話人の改選、新入会員の紹介などが終わったころには、町に片かけができて快い夕風が流れていた。(T生)

表紙のことは

莊野 丹秀 (内海)

このごろは、果物や野菜も季節はずれでも店先に顔をそろえている。たべてみるとしゅんものの味よりうすばけて味や風味はおちる。ただめずらしいから価格も高い。芸術品もそんな品が多い。ただ珍しいとか、希少価値であるというので随分高い価格がついている。初秋そよぐ街角でそっと苦笑したくなることもある。

随想

辛抱することね、そして……

岩原 文男 (高知)

大相撲の力士高見山が、外人記者クラブに招かれたとき、「日本で成功する方法は？」と聞かれて「辛抱することね、そして努力することね」と答えた、とある相撲雑誌で読んだことである。

彼は日本の大相撲界の若人に身をもって示してくれたのである。彼の行動こそ日本相撲界のお手本ものとして表彰ものであると思うのである。外人には相撲は向かないとされているが、太平洋の真中のハワイからスカウトされて、身寄りも友人もない日本の両国の高砂部屋に入門をし、つらいことの連続で、ハワイへ帰らたかったことも何度かあったという。力士の基本訓練の内でも一番苦しいとされている股割りの特訓を、ポロポロと涙を流しながら「親孝行をしたい」ばかりに辛抱を重ねたのである。

平幕力士が横綱に勝つと金星が与えられるのであるがレコードは十一回のホルダーである。名古屋の七月場所でも幕内優勝をして、米大統領から祝電ももらっている。

こうした彼の「辛抱」と「努力」の結果である。大相撲誌から「次の大関は？」というアンケートを受けた。私は高見山と書いた。結果発表を見ると、朝日新聞の某氏と私と五十人中の二名だけだった。今までは努力しようにも、他の力士が逃げてけい古相手になつてくれなかったが、長岡の入門で相手を得た彼は「辛抱」と「努力」に全力投入である。七月場所の彼は従来の前に落ちる姿は忘れ

られたように消えていた。「辛抱」と「努力」の彼の上に「栄光」のプレゼントを期待したいものである。

短歌

茂吉追慕の旅

藤田基孝 (松山)

かすかなる歌のゆかりに遠く来てうつし世に残る老いびとに逢ふ (輝子未亡人)
雪ふみてひたぶるに登る熊野岳茂吉の歌碑のなほはるかなり
雪のこる白布しろぶの山に年古りし自生の梨の花ざかりにあふ

余 栄

ご逝去されました左記の方に対し多年電気通信事業に貢献されたご功績により叙位叙勲が授与されました。
従五位勲五等瑞宝章(五三、二、二二)
故 比企 員美殿(松山)

訃 報

次の方が亡くなりました。謹んで哀悼の意を表します。

氏 名	死亡月日	行年	所属
福田 福松殿	53・7・7	八〇	松山

特集

灯火に親しむ



近頃の好読物

高橋 数一（西条）

水野肇著『夫と妻のための老年学』（中央公論社刊・七二〇円）

これはことしの『中央公論』の二月号と五月号に分割掲載されたものを、のちに一本にまとめたものだが、私は中央公論で読んだ。これが掲載された中央公論は、いつもの号より二万部も余計に売れたというが、それだけの価値のあるものであった。

われわれ老人にとっては、たしかに近ごろ最高の読物であった。老後の健康保持はどのようにしたらいいか、呆けないためにはどんな注意を払うべきかを、四方八方から説いてくれている。同時に、老人の生きがいについてまで教えてくれているのだ。くだけた文章でかんで含めるように説かれているから、わからない箇所は一つもない。豊富な事例も適切なものばかりだ。つまり懇切にいねいの限りを尽くしているのである。

ぜひお読みになるといい。読んで損したと思う人は、まずいなと思われ。

『島田清創作集』（栄光出版社刊・二、〇〇〇円）

長崎電信出身の島田清については、前にも本誌に書いたことがあるが、不遇であった天才島田の遺作集が、『文芸復興』の落合茂氏の厚い友情によって出版されたのである。一

頭地を抜く筆力は、読者に巻を措く能わざらしめるものがある。特に満州電電にいた人は懐かしい思いをもって読めるだろう。

読書は心の糧

松本 義男（高知）

「趣味は」と問われる度に私は少なからず戸惑いを感じている。元来無趣味な男でこのような場合は「さあ！格別趣味はありませんが」と一区切りして「あえて言えば読書位いでしようか」と語尾を濁らしている。しかしこの言葉もあいまいで胸を張って申し上げる程の読書家でない。最近仕事の間をみれば三日に一度は必ず本屋に顔を出すことにしている。このところ古本をあさっているが思わぬ良書に出くわした時など本当に嬉しいものである。そのような訳で自室の片隅には雑然として新古の本が積まれている。

さて問題はこれ等がすぐに読まれているかと言うとお恥しいことながらいまだ手をつけてないものが多い。いまの私は会社勤めの身で仕事の余暇の読書は思いにまかせずその上この頃健康上のこともあって読書する時間が少なくなってきたことを反省している。しかし私のようなものはこの年になっても益々読書の大事なことと必要性を痛感していてたとえひと時にせよ雑念を去って心静かに読書の出来る事はこの上もない幸なことと思っている。私は随筆集や格言集が好きで自然とこれ等をよく読むようになった。偉大な先人達が己れの人生の深い思索と尊い経験との中からの言葉をじつとかみしめてその真理にふれた時暗夜に光明を見出し出した思いがする。

なんと言っても読書は明日への心の糧である。いま灯火親しむ読書の季節であり私も心地よい秋冷の中で精一杯読書に没入してみたいと思っている。

燈下の遍歴

沢 千代吉（高知）

文化の先端を行くとうたわれていた電信と、小学一年生でも知っているイロハ四十八文字に数字が十字、それにいくつかの記号しか使わない簡単な仕事を思うと妙にびったりしないなにかが心の隅にこびりついていた。それは口にするほどではないと決めていた。毎日のようにくりひろげられる職場の世間話の仲間には加わらなかつた。興味もなかつたが自分の身辺におこつた事柄を面白おかしく話せるほどに成熟してない自分を知っていたからのものであった。

はじめて一人で宿直をした夜、煌々と輝く電灯のもとで石川啄木の歌集「一握の砂」「悲しき玩具」を朗誦しはじめた。読みすすむうちに胸が熱くなり、声がかすれ、涙が頬をつたっておちた。

それから漱石、龍之介、直哉をはじめトルストイ、チェホフ、ドストエフスキー、ゲーテ、ルソー、ルナール、モーパッサン……文学への遍歴に胸をこがした。

心理学をやらねば小説もわからぬという先輩の言葉に動かされて古本屋で上野陽一の「心理学通義」を買った。菊版三百頁の大冊、今まで買ったこともない大きな本を机の上で開き、寮生の寝静った寄宿舎の一室で一人起きて頁をめくる。めくる度にパリと大きな

音を立てるのものはじめてのことだった。学者
 気取りになって夜明けまで読みつづけた。

それから半世紀近い年月が流れた。小説と
 心理学は今も私の心を温めつづけてくれている。それはまた燈火のもとにくりひろげる孤
 独な心の遍歴でもあった。外国語を知らぬ私
 にとって翻訳文化の繁栄しているこの国の有
 難さもわかりかけてきた此の頃である。

心の遍歴は曲りくねっていても、もの心づ
 いてから現在まで続いている一筋の道である。
 これからもさまざまの夢を重ねていきたい。

肩のこらない本の話

高橋 寛(徳島)

週刊碁 編集発行 日本棋院

販売協力 朝日新聞社

一部一〇〇円。火曜日新聞とともに配達さ
 れます。昭和五十二年十一月十五日第一号発
 行。現在第三六号までいっております。私は
 第一号からとっております。なかなかいい事
 がのっている、と私の娘婿は申しました。

週刊新聞形式のものであります。私の場合
 は、まだ前の新聞を読み終らないうちに、次
 の新聞が来ることが多いのです。

四月四日号 火曜日 第二号、に、朝日
 囲碁フェスティバル、五月三日、大阪マーチ
 ヤンダイズ、マート、で、の記事がのってお
 りました。私はCグループ、(五級―九級)
 に、九級で申込みました。五月三日、当日徳
 島県からの参加は、私一人、とのことで、翌
 日の朝日新聞徳島版に会場で碁を打っている
 私の写真入りの記事がのったりして、いやは
 や、でした。二勝一敗の成績で、九級の日本

棋院認定状もその場でいただきました。九級
 を大事にしなくては。

こんな楽しみもありました。

雑 感

村上 季隆(松山)

読書とは遙かに縁遠い今の生活ですが新聞
 小説と大耕、層雲だけは未だに続いている。

ただ青年時代に読んだ出家とその弟子、こ
 れは私の青春の心をゆさぶりました。親鸞の
 えらさ、唯円の純真さ、私の進むべき人生の
 大きな指針ともなりました。その後吉川英治
 の親鸞の映画も見ましたが生れ乍らの人間離
 れとして描かれ凡庸の遠く及ばない高い位置
 の人でした。その点人間親鸞を読んだら実に
 俗人臭く吾ら凡人と何ら変らない愚禿親鸞で
 あり常々我が死骸は鴨川へ流して魚のえさに
 せよと九十才近く大往生されました。その後
 二百年もの間黒谷に小さな堂だけだったもの
 が蓮如によって西本願寺となり、家康によつ
 て更に東本願寺と二派に別れて対立している
 現在です。(丹羽文雄著)

話が飛躍して宗教のことになります。天
 台、真言、真宗、禅、日蓮と五大宗が鎌倉期
 から脈々と現在にその伝統を維持しておりま
 す。道元の日日の生活は私の為に費さざらん
 事を、或は南無大師、又は南無阿弥陀仏、又
 は法蓮華経と、各々救われる道が説かれてい
 ます。でもそのうち上位四宗は現在死語に等
 しく、ただ一番若かった日蓮だけがあの激し
 い気迫を持って現在も生き続けている現状は
 何によるものでしょうか。即ち折伏を基幹と
 する布教、以外の何ものでもありません。慈

覚法然皆悪魔、真言忘国律国賊ただ法蓮華経
 のみが日本国土を護持すると喝破して自信満
 々です。龍の口の死刑、伊豆の遭難、いずれ
 も妙法の利剣によって現在も池上本門寺に堂
 々たる偉容を誇っています。

キリスト教は宮々と布教を惜しまない。一
 方仏教は葬儀屋と化しまさに日蓮の名言、末
 期の感を深く抱いています。創価、立正、い
 ずれもが今一番活動的だと一人淋しく思っ
 ています。

因に私は真言で菩提寺は八十八の四十九番
 浄土寺です。紙数の関係で大分縮小して頂
 いて舌足らず御免なさい。

「奥の細道」を探る

真鍋要三郎(多度津)

俳聖松尾芭蕉は「奥の細道」の冒頭に「月
 日は百代の過客にして行きかう年も又旅人な
 り」と李白の「天地は万物の逆旅なり光陰
 は百代の過客なりそして浮世は夢の如し」と
 ある。西行好みの芭蕉は漂泊の旅路の果てに
 死んで行った李白や西行たちを思い、ひとつ
 には遥かなみちのくにの数々の歌枕に旅心を
 駆り立てられ四十八才の元禄二年三月二十七
 日曾良と江戸を発っている。見送りの友人に
 「行く春や鳥啼き魚の目は涙」と別れを惜ん
 でいる。

「行けども行けども野中を歩く日暮れてと
 ある農家に宿を借り、夜明けて又果てない野
 を行く那須の篠原を過ぎやがて白河の関を経
 てようやく旅の心定まる」とある。松島、一
 の関、平泉へと衣川では散った義経を偲び
 「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んで出羽の国

へ、古刹立石寺に詣で「静かさや岩にしみ入る蟬の声」の句を残し義経主従の奥州落ちの道を逆に最上川を渡り鶴岡、酒田を経て北陸へ日を重ねて大垣から大阪へそして御堂前の花屋仁左衛門方で一生を終えている。一説にはソノと言う弟子宅で病死したとも言う。

想うに芭蕉も出家した西行もその目と心は常に無常と自然美との中を今もなお旅を続けている思いがする。私の人生の旅も春夏秋冬水の流れと共に死と言う大海へ急がれてはいるが森羅万象総て生々流転この世は仮寝の夢枕かと思えば有縁の人々も懐しく過ぎ去った日々も又残り余白の人生も尚更にいとしまれてくる。

方丈記

栗田 信雄（松山）

「行く河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖とまたかくの如し」

これは鴨長明による随筆「方丈記」の序章である。随筆というと普通は作者の興のおもむくままに書きたいことを自由に書きつらねたものとの印象を与えるものであるが、方丈記は理論整然とした構成のもとに一つのことを述べている点に特徴があり、これがこの作品を思想的に深いものにし清澄の気品を与えているといわれている。

これは彼がうちつづく動乱とたび重なる天災地変による人生の流転と無常の中において、人生如何に生きべきかについて自己を凝視し、人間の本性を明らかにしたものであり、一読

の価値があると思われる。

わたくしは高校の国語の参考書を使って読んでいるがこれで十分である。（六〇〇円）

包丁

田中 義隆（松山）

懐石料理「辻留」の辻嘉一氏に、「食味」という著書がある。例の乱読癖で手にとってみて、なかなかおもしろかった。

「包丁の使い方一つで、人の性格がわかる」とは、むかしからよくいわれていることです。（中略）幸田文先生もいつていらっしやいました。新しいお手伝いさんが来たとき、長く続く人か続かない人かどうかは、菜っぱのおひたしを切ったその切り口を見ればわかるそうです。

なるほど、そういうものかと思う。こういうことを読むのが、私は好きだ。

だから著者が有名な手打ちうどん屋で、うどんを切ってみたくなり、「切らしてほしい」と頼んで包丁で切り始めたところ、それまで風邪で次の間で寝ていた老主人が、『その切り方ならよろしい』と、承知してくれたのでしたが、顔も見ないで、切る音だけで手際がわかるらしく、道は道なりと合点したという場面が、いっそうおもしろいのである。

悔もない

長崎 輝喜（高知）

黒の袴に緋の着物、懐に厨川白村、武者小路実篤などをしのばせて、桜の宮公園のベンチで読み耽ったのがわが青春のはじまりであった。下宿の蚊帳の中で金色夜叉を読み明か

したのもその頃であった。

間もなく軽い肋膜炎を病み、眼鏡を必要とするようになった。診療所の先生は無理を禁じた。それから、それなりのわが人生がはじまった。健康が第一だったからである。

健康が恢復するに従い、また古本屋通いはじまった。芥川竜之介、夏目漱石などの単行本を漁った。初版ものに出合うと薄給を省みなかった。貴重であった。全集ものより重みがあった。

だが、この貴重なものは、今日一冊も無い。戦後のわが一家の、生活と生命をつなぐ、当時の大金と化したからである。

時折なつかしく思うが、今更何の悔もない。

楽しい川柳

福田秋風郎（松山）

私の川柳は生活の中から拾うこと、つまり生活即川柳であると言うことです。

川柳は人情の詩とも言われ、俳句のように季語と言う約束がなく、日頃身近かに起きたこと、見たこと、聞いたことを「五・七・五」の十七音字に詠えばよい訳で、鉛筆と紙さえ有れば誰にでも自由に楽しめる文学です。

川柳家は民主的で流派は問わず、全国到る処に友達がおります。少しでも多くの方々に川柳を通じて友達を持ち、楽しい老後を通して貰いたいと願っております。

同じ物を見て作句しても、その人の個性と表現の差で、それぞれ別な味わいを持つ句が生まれることも川柳の持つ魅力です。

近詠五句

人作りむかし他人の飯を食い

カラツ屋の棚震度五をフト思ひ
 円高の利鞘御三家だけの春
 外濠を埋め休戦のロッキード
 三人の子に三様の親の夢

老化現象

宮脇 義雄 (高松)

経済界はブック戦争時代だといっている。毎日の新聞をひろげると見るなといわれても自然に目に飛込てくるのが新刊、既刊、重刊の出版広告である。マンガ本を立読する子どもにはじまって、応接間の飾りにするから何かりっぱな本を見つろって一揃届けてくれと書店に注文する大人まで日本人は本が好きだという。『知的な飾、知的な見栄誇示として本を買うことも必ずしも悪くない。しかしいちばん大切なことは読むこと、読むにあたするものを選んで読むのがいちばんいいこともまた当然のことだが本の洪水のなかで手当りしだいに乱読するうちに精神的にすこやかに成長し生涯忘れることのできないような本を見いだすし、又さまざまな本を読み進むことのなかで必要な知恵を自然に豊にしていることができるであろうと積ん読にも意味があるし乱読もまたけっこう』と文芸評論家小田切秀雄さんは若い人の本の読みかた選び方の質問に答えている。

ブック戦争で書店は多くなるしその在庫種類も豊富とあって購読者(私)にとつてはありがたいご時世に会えたといいたいのだが高価なことが積ん読気にもなれずむやみに乱読もできず読書の時間がテレビや新聞をみる方に移りつつある。

天地の中で

太田 集 (徳島)

近頃になって思うことはよくも今日まで生かされてもらっていることである。昭和時代も半世紀になって明治時代に生れた自分としては「明治は遠くなりけり」を感じ何んか伝説の域に達したよううで生命に対する感謝も深い。

「有難く今朝を迎えて健やかに今日も楽しく生きて思う」といった考えで一ぱいだが不完全な人間のためつまらない妄想が頭の中を駆け巡る。情けないが仕方がない。生きていく以上因縁はつきもので宿命による環境から逃れることはできない。この上は現在を最上に生かすことより方法はない。自分としては平凡だが地上の塵でも拾う心で小さい親切でも行いたいと思っているがこれすら疑わしい。「愚にこもる」ことの尊さは知っていてもなかなか実行は難かしい。そして天地は自分共にあるが時間は遠慮なく過ぎて行く。油断も隙もない。この天地の中の生命と生活を思えば思うほど摩訶不思議である。

生活の基礎になつていて関係の深い電話にしたところで原点をさぐれば特性の違った陰陽の電極によって話ができてお互の心の理解に役立っている。思えば天地の中の妙諦はつきない。

灯火の魔力

夷 俊雄 (高松)

秋色は日に日に濃くなって、樹の葉のそよぎにも秋の気配をそれとなく感じます。

灯火したしむーそう、私達イエシロアリの一族もまた灯火には抵抗し難い強い魔力で一命を落とす程に吸い寄せられる時期がございます。私は女王です。我が子を強く誘った七月の灯火を想出すと嬉しくもなったり、恐しくもなったりします。

数年前、王は自らの優れた触覚と臭覚とで居城(本巣と呼ぶ)の位置をうらない、土中深く基礎を設定しました。やがて、本巣は王の天賦の英智と職蟻、兵蟻の勇敢かつ献身的働きで、長さ二メートル、直径八センチに及ぶ紡錘形の高層ビルに増嵩し、外敵からは発見されない金城鉄壁のものになりました。外には家屋に向つて縦横に延びた蟻道と数個の分巢を設営し、王の権勢は近隣ならばものはありません。天敵黒蟻の頭だに接近を許しません。ビル内では、王と女王(私)は広い王室に鎮座し、その王室を中心に卵の貯蔵室・幼虫室・ニンフ(翅をもつ前期)室・職蟻室・兵蟻室へと外へ向つて同心円的に配置されました。頭数にして、数万の一族の生活活動は、活発・壮観そのものでございます。

また、ビル内は一年を通して外気より五度(C)ぐらい高く、湿度は九〇%以上に保持され特に活動旺盛期は三〇度(C)ぐらいで快適です。なお、王の威力の及ぶ所は半径八メートル、尖兵中隊に似た分巢には職蟻、兵蟻が分駐しております。人間にたとえば約四八軒の行動半径に相当するこの素晴らしい徒歩力!上方に向う餌取蟻道、下方に向う水取蟻道、この見事な土木工勢力!

餌は木材が主、ガラス・鉄以外は何でも食

べることが出来る（うらやましいなあ！）。木材の主成分は、セルロースとグリニンです。セルロースは体内の原生動物によって消化吸収、グリニンは排出。この餌は、自分の他長い蟻道を通って王室にいる王、女王に口うつして届けられます。

私は身長七〇ミリ、B一五ミリ、H三五ミリ、W三五ミリ以上、肌は黒みがかった緑白色の美女です。王も巨体のため女王の私を連れての管内視察とか旅行などへ出かけることはできません。毎日が食・性に追われ多忙、勿論産卵、排泄物の始末など常時付き添っている職蟻が有能なので、至れりつくせりです。職蟻は全頭数の九五〇以上おりまして、前記の他、巢内の清掃、巢の構築、餌の運搬、幼虫の世話などをいたします。職蟻の副王、副女王などへの昇任昇格は格別のこと（王、女王の没、または蟻道切断による分巢の独立など）がなければいかに見つけます。兵蟻は専ら外敵からの防衛に従事するもので頭あごが大きいのですぐ見別けられます。総じて王、女王の寿命は数年、職蟻などは約三年であります。

このようにして、巨大な生活組織体の職階級は明確で、かつ、居室の機能的配置とあいまってあたかも時計の歯車の運転の如く、ごく自然（違反がない）円滑、快適に運行されるのでございます。

この高層ビル内の生活活動の一番活発で賑やかな季節は七月上旬、沈静なのは冬期です。七月上旬の高温多湿の夕暮時は、さすがのビルも爆発するほどの賑やかさです。羽化したハネアリー、結婚適令期の有翅成虫一を旅立

たせるタイムです。飛び立つ雌雄、友人を見送るため職蟻、兵蟻のグループが出口（数ヶ所ある）に殺到し、盛大な歓呼で見送ります。これは空母から発進する戦闘機に似て、次ぎ次ぎ息つくひまもなく、ツッー、ツッーツッーと飛びたちます。四枚翅をサラサラ音をたて舞上がる恰好のよき！母なる女王（私）のことも忘れ、溢れる若さ一杯、前方の灯火一点目ざし、突進する様の勇ましき！

数十、数百、数千もの集となり群飛乱舞する騒音！群の中から短い時間で自分の夫を求め、妻をさがしての狂乱ジャズ！

私（女王）がうれいのは一対のカップルとなつて営巢のうえやがて十日後産卵して欲しいということでございます。

今この狂騒の行方は果たして営巢への灯火なのか、はたまた人間のしかけた罫への灯火なのか。嬉しくなったり恐しくなったり。



随

筆

歌人斎藤茂吉追慕の旅

藤田 基孝（松山）

表題の全国大会に出席の為五月十二日夕刻船で出発し、東京仙台を経て山形県上市市に着いたのは翌日の夕刻であった。

桜の花とツツジが同時に咲き競う電電公社の保養所に一旦荷を下し少憩の後、上市市主催の茂吉前夜祭（参集者約四百名）に顔を出してから宿にもどり温泉に浸りて足を伸ばす。

翌朝は金瓶の宝泉寺に茂吉の墓参を済ませ同寺で行われる茂吉追慕の法要に参加した。宝泉寺本堂正面には、髪白き未亡人の斎藤輝子刀自が静かに着坐されたが、私は図らずもその未亡人の傍に坐りて焼香をする事ができて甚だ光栄に思つた。

法要終了後、寺に隣接し保存されてある当時の金瓶小学校を見学し、此処に学びし茂吉少年を偲び、更に茂吉の生家や戦時中疎開した茂吉が住みし倉庫も見せてもらう。丁度その庭に茂吉の好みし翁草が咲いて居た。横向きに赤き唇を開き白毛を戴きて咲くこの翁草の前に私は屈み込んで泌々と眺めた。

このあと一同と共に三吉山の見える茂吉記念館に行く。斎藤茂吉に関わる夥しき資料が全館に充滿し丁寧に見て廻る事は容易ではないが草鞋を穿き棧俵を腰に吊りて最上川の堤を行く茂吉の写真は特に親しみを覚えた。

大会三日目は蔵王山吟行会である。一同バスに分乗して出発、中腹の坊平を過ぎると残雪が窓外に輝き、薄緑に萌え初めた落葉松の林は最も清々しかった。

刈田峠でバスを降り、ここより徒歩で蔵王の最高峰である熊野岳に向う。大きな雪の塊が幾つも浮ぶお釜（噴火口跡）を右に見下し一面に凍りて残る白雪を踏み、ごろごろ石の続く四キロの登山には少々草臥れたが二時間程で頂上に達した。よく晴れし頂上には遭難者の慰霊碑が幾つかあり蔵王権現を祀る小社の前が出る。少し離れて茂吉の巨大なる歌碑が天を突く様に立っていた。

この頂上から見下す蔵王連山は残雪が白く眩しく、雲海の向うに遠く吾妻、朝日の連山

が雪を被りて雲に浮く、雄大にして荘嚴、よくも登り来しものと思いつつ歌碑の前に写真をとる等して少憩の後、石塊に転びながらも無事に下山したのであった。

ついに志士の墓参を忘る

高橋 数一（西条）

テレビの連続ドラマ『花神』の終りの方で高杉晋作が指揮して吉田松陰や頼三樹三郎の棺桶を運ぶ場面があった。それを見ていたとき、一つの後悔がまたしても私の胸をよぎるのであった。祖父に頼まれたことを、ついに果たさなかったからである。

安政の大獄で吉田松陰、頼三樹三郎、梅田雲浜、加茂百十らが江戸へ唐丸送りとなったとき、私の祖父文吉が江州彦根で見送っているのである。祖父の主人は、孝明天皇の和歌の師であり弾正台大監察の役であった加茂近江守百十であり、一方懇意にしていたのが頼三樹三郎である。それらはむしろ祖父の死後に明らかになったことであつた。百十は赦免されたが、三樹三郎は松陰らと共に処刑されてしまった。

「広島には国泰寺ちゅう大けなお寺がある。ミキサブロウさんちゅう人のお墓がそこにあるきに、参ってあげてくれや」と、広島通講入学がきまった私に祖父がいった。だが私はそれをいい加減な気持で聞いていた。

通講在学中に友人たちと一度国泰寺へ遊びに行きはしたが、ミキサブロウさんの墓なんか気にもかけなかった。のちに広島通信局に勤務していたとき、国泰寺の一角にある大楠の幹に「志士頼三樹三郎墓所」と大書して掲

げてあるのを、時々電車の車中から見、そのうちにと思ひながら、ついに墓参を怠つたのである。

残念に思っている。しかしさらに残念なのは、三樹三郎と祖父が一緒の古い写真を、幾度かの転居の間になくしてしまったことだ。

薊野墓所めぐり

岡崎 花子（高知）

土佐の高知のはりまや橋でと歌われるこの播磨屋橋より東北四キロ私の住む薊野（あぞうの）の里に点在する先人の墓所めぐりを心通う人達と行い、まず榎（なぎ）の木の茂る掛川神社へ足を踏み入れた。榎の木は昔浦戸の沖から航海の目印になったという。この木は幾百星霜を耐えて来て人の世のうつろいを心に秘めて何も語らない。私は渡された榎の木の小枝にそっと口付けをしたみた。

この掛川神社は山内家が遠州掛川より土産神を勧請し、大高坂城鬼門の鎮とされたところである。

十ヶ所あまりの墓所めぐりのうち一、二をしてみる。

まず橋詰愛平の墓から述べてみる。橋詰愛平は堺事件の生き残りであり、フランス人を殺した罪により籤引きで二十名が切腹を命ぜられた。十一名までが割腹し見事に土佐藩士として日本武士道の意気を示した。武士道を理解しがたいフランス人はあまりの割腹の凄惨さに驚き、切腹を制止した。その十二人目の生き残りが橋詰愛平である。

さらに板垣退助の墓へと進む。退助の墓は広いアスファルトの道を通った高台にある。

巾広い敷石の上に定紋入りの立派な墓石が夫人のとともに並んで建っていた。

朗々と詩吟の流れるなかで一人一人ぬかずく。一行の記念写真を撮り、夕陽が山の端を染める頃心静かに山を下りた。

掛川神社西隣の国清寺で「円明」という小冊子を拝読した時、「ご先祖さまありがとう」という文字が目についた。「板垣死すとも自由は死せず」と板垣先生の平和を愛する気持ちも「ありがとう」という言葉に今でも一致すると思う。

油絵を楽しむ

谷 信雄（高松）

「オジイチャンが油絵かいたりするの！」。そんなの学校で習とらせんやろうに」

「コレ!!とも子ちゃん。まあ絵を見てからいってくれヨ」サークルの作品発表会を見てきて、とも子さらにいわく。「絵はマアマアだけど額縁がモノスゴウよかったネエー」
「ヨーン。そんなこといってたらもうオコツカイは半分にしてあげるワイ」孫と電話のひとこま。

つれづれなるままに、油絵を初めて二年余り。このごろつくづく絵がだんだん下手になってきているように感じる。初めの頃の方がよくまとまっていたようにも思えるが。

この前のモデルさんも奇麗にお化粧して理知的な顔、ドレスであったのに、できた絵は片方の目が半分しかなかった。またときには頭の髪の毛が針金の山のようなときもある。

絵をかくとき、二つの異なった気持ちがあることに気がつきます。感動を優先さずか、

形を優先さすかです。モチーフに向かうとき自分の受けるエモーションを絵に出したい気がします。

それは、形を正確にとる以前に自分の感情（感動）を筆先にのせて絵をかくことになり、わめて荒っぽい絵になります。

しかし、そこにリズムが生れて絵に動きが出てくるように思えます。

さもあれ、絵をかくということは、まず自分にとって楽しくなければならぬ。このようなかき方でゆかか、あるいはまた形を忠実に追ってゆくかは人それぞれの好みではある。灯火親しむ秋。絵の上手、下手は別にしてたのしみながら自分自身の情緒をかきつけていきたいと思えます。

退職と趣味と妻と

岡本 政雄（宇和島）

ことし四月愛媛電友会に入会した。退職後は趣味でもって余生を楽しむことにした。趣味の中に剣道、居合があるがこれは体力づくりに役立つので続けたい。

八ミリも趣味の一つ。五月中旬「八丈・三宅・房総観光の旅」に出た。そうしてバスマグアイドさんの案内のままに一時間ものの記録映画を制作した。この八ミリも体の動く限り続けた。何様経済的に相当負担がかかるのでぼつぼつと言ったところ。

さて、このように言ってみれば、自分の好き勝手なことをして余生を楽しく暮せる者はそうざらにないと思っている。ともあれ、退職後余裕をもって生活ができ

るのは妻の協力があるためであり、その妻に感謝しているきょうこの頃である。

身に泌みる親の有難さ

吉村 正雄（松山）

五月二十四日朝七時長野発名古屋行き急行き一号に乗った。信州長野には過去二三度行ったことはあるが、久しぶりに家内と一緒に、浦和に居る娘夫婦を訪ねて、息子夫婦の居る長野に立寄っての帰りである。

今年春三月に息子に初めて女子が出生した。私にとって初めての内孫であり初対面である。元気で喜びに満ちた息子夫婦と孫の顔を見て心楽しく夫婦そろって善光寺参りの出来たことを有難く思った。朝早いとはいえ車両には他にお客は一人もおらず結局名古屋まで途中で五人乗降客があったのみで国鉄の赤字経営がうなずけるようだった。

快晴に恵まれ新緑の美しい木曾路を走る汽車の中でゆったりとした気持ちで窓外の美しい景色に目をやりながら嫁の作ってくれたおにぎりをほおぼりビールで喉をうるおした時しみじみうまいと思った。

娘夫婦と間もなく満二才になるいたずら盛りの孫、息子夫婦と可愛い寝顔の孫、みんな元気で平和な生活をそれぞれ楽しんでいるようだ。

私の青春時代は生活社会環境共に現代とはあまりにも大きな相違のあることを思い、やはり戦争の事を考え平和の有難さを感じざるをえなかった。その為苦勞も多かったが、それ以上に私の父は私達大勢の子供、孫それぞれをの幸せを願い、行く末を案じ、いかに苦勞

の多かったことかと、この年になって今さらながら亡父を思い出し親の有難さが身にしみる思いがした。
生れて初めて俳句のようなものを作った。

新緑に映える赤屋根木曾路かな

五月晴れ木曾の御嶽雪化粧

投稿規定

- 一 会員消息 四〇〇字以内
- 二 短歌、俳句、川柳 五首又は五句以内
- 三 随筆、随想 六〇〇字以内

原稿締切 十一月五日

原稿の取扱についてはお任せねがいます。

編集後記

▽沢山の方のご投稿をいただき有難うございます。編集上の都合で多少手を加えさせていただきます。お詫びします。

▽新年号の原稿は「未年のささやき」として干支にあたる方に何かひと言お願いしたいと思えます。ご協力下さい。

▽新しい会員名簿が出来ます。お手元にとどきましたら住所等ご確認下さい。（玉川記）

電友会四国連合会報 第二四号

昭和五三年一〇月一日発行

編集発行 電友会四国連合会

事務局

松山市一番町四丁目（二七九〇）

四国電気通信局内

電話（〇八九九）三六一二〇三三

印刷 四国電話印刷株式会社